

【学年】 1年	【教科・単元】算数科「ずをつかってかんがえよう」(全6時間)
【実践内容】 ○単元目標 順序数や異種の数量を含む加減の場面、求大や求小の場面についても加減計算が適用できることを理解し、それを用いることができるようにする。 ○実践の概要 チョコレートは13こかいました。 あめは、チョコレートより6こすくなくかいました。 あめはなんこかいましたか。 どんなお話なのか、分かっていること、聞かれていることは何か、を確認した。 その後で、出された疑問について、解決していった。 なにざんになるのかな。 たしざんだとおもう。→理由…「あめは、なんこかいましたか。」と聞かれているから。 ↓ この意見に対して… ・でも、「ぜんぶで」というキーワードがないよ。 ・たしざんしたら、チョコレートよりふえちゃうよ。 ひきざんだとおもう。→理由…あめは、チョコレートより少ないから。 たしざんしたら、かずがふえるから。 ★知的好奇心について 「ぜんぶで」「みんなで」というキーワードがあればたし算になり、「のこりは」「ちがいは」などのキーワードがあれば引き算になる、と学習してきている。本単元のねらいは、これまでに学習してきた加法や減法の用いられる場面とその意味を広げ、理解を深めることである。それゆえ、問題解決において、何算になるのか、が児童にとって大きな課題となった。その課題を解決することが、知的好奇心を満たすことになるのではないかと考えた。	
【児童の様子・反省】 キーワードだけをもとに演算を決定してしまいがちなので、場面の様子を読み取ったり、図を描いて考察したりすることが大切なのだ、ということに気づいてほしかった。 本時において、たし算だと思う理由で、「あめはなんこかったか、と聞かれているから。」と答えた子どもは、まさに場面の読み取りができておらず、キーワードだけを頼りに何残になるのかを決めていた。また同じようにキーワードを手掛かりにしていた子どもは、キーワードがないと分からない、と式が立てられなかった。 そこで、たし算や引き算だと考えた友だちの意見を聞き合ったり、みんなで図を描いたりしながら、何算になるのか、を解決していった。図を描くときには、分かっていること・聞かれていることが一目で分かるような描き方をしていた。そうすることで、はっきりしないときには図を描けばいいのだ、ということに自然と気がついていった。 演算の決定は、難しい。様々な問題に触れる機会を作ったり、キーワードだけに頼らず場面の様子の読み取りを丁寧に行ったりすることが、今後特に重要だと感じた。	